

# 川は命が共鳴できる場

多摩川癒しの会  
事務局長 荒木 稔

最初にIさんとHさんからの手紙を紹介します。  
「…只今11時半、今日の興奮で安定剤を飲んでも、多摩川べりの様々な光景が思い出されて眠れません。リフトカーの上からしか眺めたことのなかった多摩川の河川敷、遊んでいる人や野球をしている人達を私とは無関係な光景として見ていたあの場所に行けたのは夢のようです。

この年になってはじめて頂いた芋煮のおいしさ、アートと称して枯れ草で作った長谷川先生のお顔。石のデコボコをものともせず柔らかく押ししていた水陸両用車椅子。本当に楽しい一日を頂いてありがとうございました。

これまで、皆様に迷惑をかけることのみ心をつかって病院の往復しかない生活でしたがこれからは今日の様な行事にどんどん参加させて頂いて、生命のある限り楽しく明るく生きてゆきたいと、今日はとても強く感じました。ありがとうございました。)(Iさん)

「いろいろとお世話になりましてありがとうございました。秋晴れの天気恵まれて、久しぶりに多摩川の美しい風景を見ながら、おいしい芋煮をごちそうになり楽しい一日でした。初めての参加でしたが、みなさんとてもいい顔をして楽しんでおられました。95歳の元気な高齢者を見て、実母93歳(痴呆症)の介護も負けずにがんばって長生きさせようと思いました。私も地域の人達と助け合って生きて行きたいと頑張っています。…」(Hさん)

私たちは平成10年4月に多摩川癒しの会(当時の名称は多摩川癒し研究会)を設立し、障害者と健常者が一緒になって「多摩川の癒し」を体験してきました。上記の手紙は芋煮会(&リバーアート・舟遊び)イベントにおける、障害者(中年女性)の方と高齢者を介護されている女性の方からのものです。

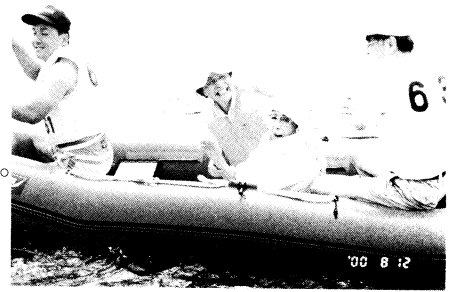


最初は「多摩川の癒し」とい

っても半信半疑でした。しかし、実際に河原でイベントを行ってみると、障害者、健常者の隔てなく、参加者ほぼ全員で「多摩川の癒し」体験を共有することができました。イベントでは、車椅子の障害者の方が車椅子から降り立ち、自分で歩き出し、家族や仲間の障害者を驚かせることもありました。また、無口でほとんど言葉を口にする事の無かった車椅子の高齢者の方がイベントの感想を生き生きと述べる事などもみられ、イベント参加者はイベント毎に障害者の方のリハビリの進展や、生活に元気が出たことを目の当たりにしています。

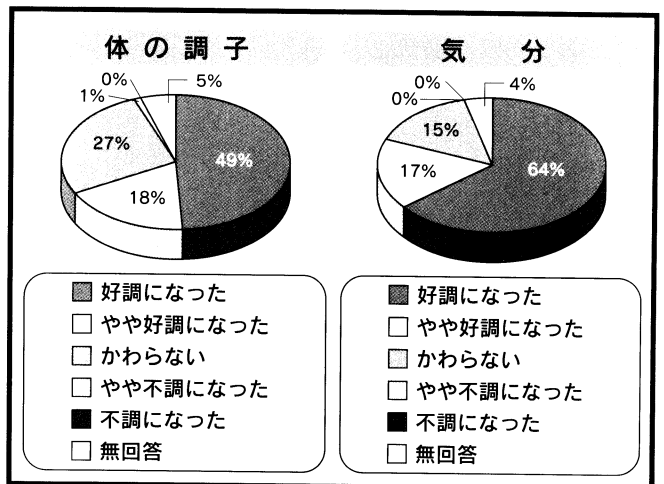
多摩川癒しの会は「多摩川の持つ癒し効果を体験し、その中でバリアフリーの川づくり、まちづくりを考え、人々と交流することを目的」に障害者と健常者によって設立されました。

会長には医師の長谷川幹(桜新町リハビリ



テーションクリニック院長)があたり、会員は多摩川で活動する様々な市民団体、町会などの地元諸団体、福祉団体、障害者の親睦団体、医療関係者、スポーツ少年団関係者、地域の様々な民間団体・市民団体のメンバーなどから構成されています。また地元企業にも賛助会員として参加していただいています。世田谷区、国土交通省京浜工事事務所には強力なサポーターとして参加していただいております。イベント毎に様々な便宜をいただいています。

なお、会ではいかなる障害の方にも参加していた



だいており、下半身麻痺の運動障害の方、難病で運動が出来ない方、視覚障害の方、知的障害の方など様々な障害の方に参加していただいています。



会では障害者と健常者が一緒に協力して、多摩川の水と自然に親しむ四季のイベントを企画・準備・実施して、「多摩川の癒し」を体験してきました。イベントは四季に併せて年間4回行い、川で遊びます。春は河原の野草の試食、夏はゴムボートによる川下りや釣り、秋は芋煮会、冬は餅つきや凧上げ等を通じて体験しています。

春の野草の試食では、河原に自生しているヨモギ、シロツメクサ、ヒメジョオン、セイタカアワダチソウなどの新芽を野外用車椅子を使うなどして障害者の方が採取し、天ぷらにして食べます。セイタカアワダチソウの新芽が香ばしく一番人気があります。

夏の川下りはゴムボートや大きなチューブで多摩川の本流を数100m下ります。障害者も健常者も多摩川の水に触れる体験はこれまでほとんど無かった体験であり、大きな喜びを味わうことができます。釣りも「本当に魚が釣れるとは思わなかった。今晚は釣りの夢を見そうだ。ありがとう。」と障害者の方が感想を述べられています。

秋の芋煮会では河原で芋煮を賞味するとともに、リバーアート(河原の石や草でアート作品をつくる)や音楽鑑賞(ギター、琵琶)、歌声(皆で民謡などを歌う)を楽しみます。

冬は餅つきや凧上げを行います。餅つきでは河原のヨモギを入れた餅もつくります。凧上げは凧づくりをして凧を揚げ、河原の風を五感で体感したり、スポーツカイトの妙技を見ます。

会では「多摩川の癒し」を客観的に把握するために、障害者、健常者、スポーツ少年団の子どもたちなど参加者全員に「癒し効果測定のモニター」になってもらいイベント前後2回の健康アンケートに回答していただき、感想文を提出してもらいました。

数回のイベントのアンケートについて集計分析したところ、皆が体験していた「多摩川の癒し」について実証することができ、数値的にも表現することが

出来ました。会ではこの結果を「体験的方法による多摩川の癒し効果とバリアフリーに関する研究報告書」としてとりまとめ公表して反響を呼びました。

活動をはじめて3年半が経過し、会では河川整備基金の助成を受けて、活動ノウハウを「多摩川癒しのデザインノート」(A4判36頁カラー)としてとりまとめ刊行しました。

「川に癒し効果がある」、「川に行くと健康になる」といった素朴な考えに基づいて川での癒し効果を考え、体験しようとする方が増え、独創的な癒し体験活動が試みられ、川を舞台にする障害者と健常者の交流活動が世の中に広まること願ってつくったものです。

多摩川では生活系汚濁負荷量が大きく、かつては田園調布堰下の川面一杯の白い泡に象徴されるように大変汚濁が進んでいました。しかし、下水道の整備が進むにつれて水質が大幅に改善されてきました。下水道は計画を立てた1967年(昭和42年)から30年後の1998年(平成10年)に異例の早さでほぼ完成しました。

多摩川の水が毎年毎年きれいになっているという実感が市民を多摩川に向かわせ、多摩川では自然観察・自然保護、水遊び、散歩、釣りなど様々な利用が盛んになっています。

多摩川癒しの会もこのような背景の中で生まれました。会の活動の中で多摩川の水がきれいであることを実感し、泳いだり、潜水して生物観察したり、地元漁師でもある町会長から差し入れられる鮎を皆で賞味しています。

多摩川癒しの会のみならず、川の水と自然を求める活動は今後ますます盛んになると思われます。そのためにも、川の水と自然を保全し回復することが今後ますます大切なことになると思います。川は人の命が共鳴できる場です。

